

ディズニーランドの日本的文化変容

Japanese acculturation of Disneyland

1K08B140-5 南雲 愛美

指導教員 主査 寒川恒夫 先生 副査 石井昌幸 先生

【動機・目的】

ディズニーランドとは、「ファミリー・エンターテイメント」を基本理念としてウォルト・ディズニーが創設した一大テーマパークである。カリフォルニア州アナハイムにオープンして以来、ディズニーランドはフロリダ、東京、パリ、香港にも創設され、知名度や来園者層は世界中に広がってきた。現在、ディズニーリゾートは多くの人に「遊びの最高峰」「レジャーの代名詞」として認識され、娯楽施設の代表的な存在となっている。

ディズニーランドはロジェ・カイヨワによって分類された遊びの要素(競争、偶然、模倣、めまい)をそれぞれ含んでいるだけでなく、ある程度の身体活動を必要とする場である。また、ディズニーランドはホモ・ルーデンス(遊ぶ人)を対象として運営している施設であり、来園者に「経験価値」や「感動」を与えるためにパフォーマンスやエンターテイメントを提供している。「身体要素を含んだ遊びであること」や「経験価値を提供すること」がスポーツと共通していると気が付き、私は研究対象として興味を持った。

ディズニーランドは完成前から経済学者や社会評論家などによる推察が行われており、完成後もアメリカ研究者や建築家、心理学者、文化人類学者、サービス業者、マーケター、ディズニーランドの関係者や従業員など、様々な分野の人々によって研究されてきた。しかし、まだ詳しく考察されていない分野もいくつか残っている。その内の一つは「社会や文化がディズニーランドにどのような影響を与えているか」についての考察である。そこで本論文では、主に日本に焦点を当て、ディズニーランドが日本へ入った際にどのような文化変容を起こしたのかについて述べる。また、これまでの研究ではディズニーランドとディズニーシーを同一視しているものが多く、日本特有の施設であるディズニーシーの特異性についてあまり触れてこられなかった。そこで本論文では、東京ディズニーシーの考察を通して日本の特徴について述べる。本論文の目的は、「日米のディズニーランド比較」と「東京ディズニーシーの考察」を通して、ディズニーランドがいかに日本流に変容したかを説明することである。

【方法】

本論文を書くために、まずは東京ディズニーリゾートを経営しているオリエンタルランド社やカリフォルニアのディズニーランド・リゾートの公式ホームページを閲覧し、基本的な情報を集めた。次に、ディズニーランドを題材

とした本や論文を読み、今まで行われてきた考察や分析などを調べた。最後に、日米のディズニーランドを比較するため、両パークを何度も訪れたことのある人物に口頭やメール等で話を聞いた後、両パークの公式ホームページやガイドブック等で情報を集め、比較を行った。

【結果・考察】

調査の結果、ディズニーランドは元々アメリカ人のために作られた施設であるということと、日本文化の影響を受けて様々な分野で変容していることがわかった。日本は自国の文化や年中行事、国民性などに合わせてディズニーランドを変容させているだけでなく、独自のプログラムや商品も開発している。元々アメリカ人の郷愁を誘うように、アメリカ人の冒険に対する欲望を満たすように作られたディズニーランドは、海外の文化を吸収する能力に長けた日本に入り、日本人の「余暇を豊かに過ごしたいという願望」や「海外旅行に対する欲望」を満たすように変容してきた。アメリカの郷愁を感じない日本人にとって、ディズニーランドは単なる娯楽施設となっている。サービスの質や従業員の態度、販売している商品や食べ物などにも日本の影響が見られ、特にサービスの分野では日本人特有の真面目さやきめ細かさが影響し、世界から高い評価を得ている。

また、日本特有の施設である東京ディズニーシーが、日本人が抱いている「海外への憧れ」を満たすために特化して作られていることがわかった。日本人に海外を連想させる「海」と「旅」をテーマにし、アメリカだけでなく世界各国をモデルにすることで海外旅行への欲望を更に高いレベルで満たしている。また、非現実的な空間を演出するために「日常」を徹底的に排除しているディズニーランドに対して、ディズニーシーはあえて日常的な要素を取り入れることで「海外への憧れ」に上手く応えている。

以上のように、ディズニーランドは文化や社会に影響を受けて変化している。今後は、ディズニー化の進んだ社会がディズニーランドにどのような影響を与えるのか、また、「大人も遊ぶ」という意識が広まってきた中、ディズニーランドがどのように変化していくのかに注目していきたい。